

名古屋市

西部地域療育センターだより

No. 35

正面壁画「友情」より

平成28年度 西部地域療育センター連続講座（平成28年6月24日） 事例で学ぶ発達障害の理解と指導 ～幼児期を中心に～

名古屋市西部地域療育センター 宮地 泰士 所長（小児科医）

1 はじめに

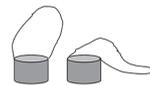
人がそれぞれに生まれ持った様々な発達特性（傾向）のうち、学習や集団（社会）生活における支障をきたさないように個別のサポートや工夫（配慮）が必要であるものを、われわれは発達障害と呼んでいます。今回は様々な事例経験を基に発達障害を持つ子への理解と対応・支援を考えていきたいと思えます。

2 スモールステップアップによる指導の大切さ

〔事例1〕 とある園で、保護者参観の日に缶ぼっくり（ひもを通した空き缶に足をのせて歩く竹馬のような道具）で元気に走る姿を披露し

ようと皆で練習することになりました。先生達は缶ぼっくりが上手に乗りこなせるようになると進級していく制度を設け、それで皆が意欲を持てるように工夫しました（図1）。しかし、A君だけは練習を嫌がり、いつも脱走していました。先生達は考えました。そしてもっと簡単な条件でクリアできる級を作り、A君を練習に誘いました（図2）。するとどうでしょう。A君は練習に参加するようになり、どんどん進級していくことができたのです。

＜図1 苦手意識（自信のなさ）は子どもの意欲を奪う＞
例：缶ぼっくり競走の発表会の練習から逃避したAくん



1級 缶ぼっくりで速く走ることができる。

2級 缶ぼっくりで15m歩くことができる。

3級 缶ぼっくりで10歩進むことができる。



＜図2 スモールステップアップによる指導計画＞

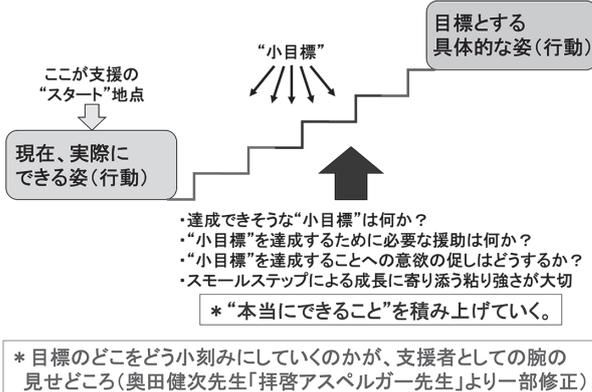
- 1級 缶ぼっくりで速く走ることができる。
- 2級 缶ぼっくりで15m歩くことができる。
- 3級 缶ぼっくりで10歩進むことができる。
- 4級 缶ぼっくりで2歩進むことができる。
- 5級 “板ぼっくり”で2歩進むことができる。
- 6級 “縄ぼっくり”で2歩進むことができる。
- 7級 “ぼっくり”なしで15m走ることができる。



子どもの意欲が低い時や集中していない時は、苦手意識（自信のなさ）が原因であることはよくあります。先生が最初に設けた目標もA君にとっては達成する自信が持てない“高すぎる目標”だったのでしょう。しかし、先生が今のA君ができる目標と達成への道筋を新たに設けてくれたおかげで、A君は「これならできる！」と思い練習に参加するようになったのでしょう。ある親御さんが「子どもにとって成功の母は失敗ではなく、小さな成功なのだと思う。」と言われました。私もその通りだと思います。その子が現在実際にできる姿（行動）をスタート地点にして、最終目標にむけてスモールステップ（小目標）の階段をつなげることが、子どもの発達にはとても大切なことなのだと思います（図3）。

また、この時忘れないようにしたいのは、スタート地点を（この子はできるはず）といった思い込みや願望で決めないということと、子どもにとっては私達大人が思っている以上に小刻みな小目標をたてないといけな場合があるということです。奥田健次先生が著書「拝啓アスペルガー先生」の中で、目標のどこをどう小刻みにしていくのが、支援者としての腕のみせどころであると述べておられますが、まさにスモールステップアップによる指導のコツを端的に表現された名言であると思います。先の例のように、子どもの気持ちに寄り添って作ったスモールステップによる成長の階段なら、子ども達は意欲を持って一段一段のぼろうと思ってくれるのではないのでしょうか。

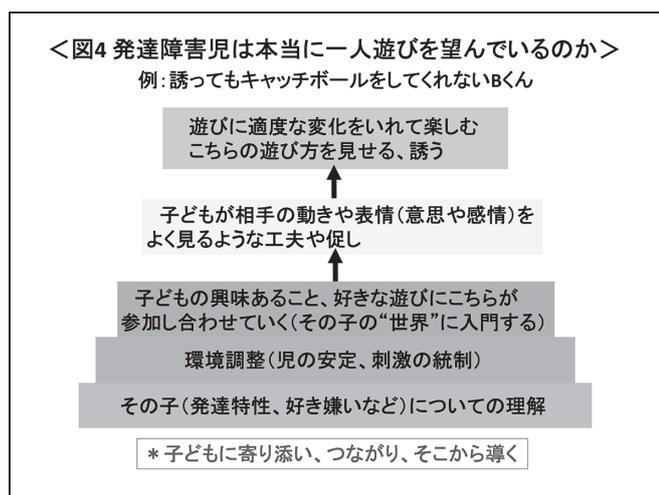
＜図3 成功の母は失敗ではなく、小さな成功である＞



発達障害を持つ子には様々な“苦手なこと”があります。しかし、「苦手だからやらなくてもいい。」とはいかないことも多いです。むしろ「苦手だからこそ、やり方を工夫して（サポートしながら）スモールステップで上達していこう。」と考えることが指導者には求められます。発達障害を持つ子が苦手な活動には、同時に複数のことに注意を払って協調的な動作を求められる運動（フォークダンス（踊り）の振付け、縄跳び、鉄棒など）、刻々と変化する状況理解が必要でルールのある遊び（鬼ごっこやフルーツバスケット、ハンカチ落としなど）や、ただじっとしていないといけない（具体的に何をしていれば良いかが分かりづらい）かくれんぼや順番待ちやお昼寝（休憩）タイムなどがあります。また、サッカー、バスケットボール、ドッチボールも苦手な子が多いです。しかし、いずれも“苦手なこと”であって“できないこと”ではありません。ルールをシンプルにして、その子に分かりやすくスモールステップアップで指導していくことで上達していくものです。しかし、そのような工夫を施さないと苦手なままになってしまう可能性があるものなのです。

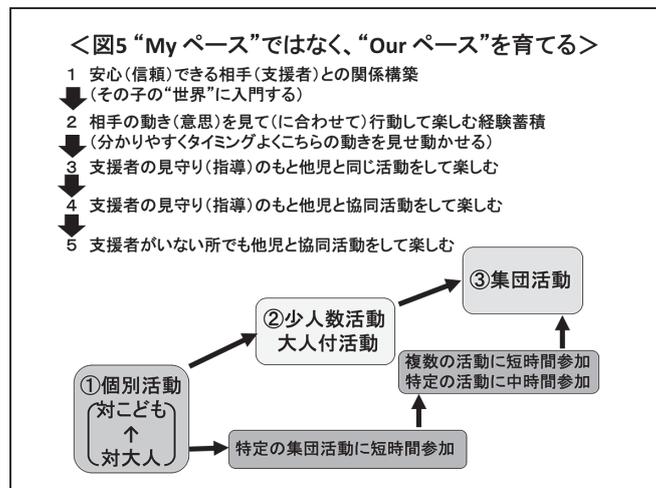
【事例2】 このようなことは対人コミュニケーションや集団活動への参加においても同様に言えることです。一人遊び傾向が強い子は、一人で遊びたいと望んでいるのではなく、他者との遊びの方法や楽しさを知らないだけなのかもしれません。自閉症のB君はお父さんがいくらキャッチボールに誘っても嫌がって、好きな調理器具を触って遊んでばかりいました。ある日、B君が触っていたお鍋の蓋がタイヤのようにコロコロとお父さんの所まで転がっていきました。お父さんがその蓋を手にとるとB君と目

と目が合いました。お父さんが蓋を再び転がして返すとB君はキャッチしてくれました。その日以来、お父さんはボールではなく、お鍋の蓋を使ってB君とキャッチボールをするよう働きかけてみました。すると、そのうちお鍋の蓋を使ったキャッチボールが続くようになり、楽しめるようになっていきました。そしてある時お父さんはそれまで封印していたボールを取り出してB君を誘いました。B君とお父さんはとうとうキャッチボールをすることができました。この事例のように、対人関係（遊びやコミュニケーション）にもスモールステップアップ指導の考え方が有効です。まずその子の興味や遊びに私達大人が参加（入門）し、そこでやりとりが楽しめるようになってきたら、子どもが嫌がらないように調整しながら今度は私達のやり方や興味に誘うことで子どもの興味や遊びの世界を広げていくことが可能になることは多いのです（図4）。



先ほどの例は1対1の大人と子どものやりとりについてですが、同年他児とのやりとり（コミュニケーション）や集団活動への参加に苦手さを持つ子にとっては、それもまた、スモールステップアップで習得していく（指導していく）必要のある大切な成長課題であると思います（図5）。他にも、注意力が弱く集中持続が困難な子がいたとします。そのような場合、まずは現在の集中持続時間+αの小目標をたて、そこまでがんばるように励まします。もちろん、その子が集中を損ないやすくなる原因をできるだけ軽減すること（苦手なことについては課題の内容や目標を調整したりサポートしたりする、誘惑になる刺激になると思われるものをその子の視野に入れないようにする、集中が促されやすいよう

に座席や周囲の状況を調整するなど）も大切です。そして小目標が達成できたらその喜びを子どもとともに分かち合い、次の小目標に向かう、といった指導の工夫が考えられます。



3 分かりやすい指導を追求することの大切さ

[事例3] 発達障害を持つ子にとっては、様々な分かりづらさがNG行動（周囲や指導者にとって困った行動）の原因になっていることが多いです。私達が普段使っている言葉には、物の名前のように具体的で視覚的なイメージが沸きやすい“分かりやすい言葉”の他に、概念的、抽象的、省略された“分かりづらい言葉”もたくさんあります。発達障害を持つ子ども達はそうした“分かりづらい言葉”に戸惑いつまづいてしまうことが多いです。Cさんは個別に指示すると分かるのに一斉指示ではスムーズに動けない傾向がありました。例えば先生が「は～い、みんな。お絵かきの準備してくださいね。」と言うと他の子達はさっと動き出すのにCさんはみんなの様子を見てからやっと動き出します。集団生活で行われる一斉指示には“分かりづらい言葉”がたくさん含まれています。この例では、“みんな”とは誰と誰のことを言うのか？“準備”とは具体的に何をすることなのか？ということです。“みんな”という概念的言葉の理解困難は「○（組）さん来てね。」や「男の子はこっち。」といった言葉にもあてはまります。さらに集団生活では、「そろそろお部屋にもどるよ～」と先生が誰にともなく声をかけることもあります。おそらくCさんはそうした“分かりづらい言葉”が理解できないために動くことができず、他の子の動きを見てやっと自分がどうしたらよいか理解できたのでしょう。また、おそらくC

さんは、具体的に「机の上に新聞紙を広げて、後ろのロッカーからクレヨンを持ってきてね。」と言えば、“準備”の意味が理解できたのかもしれません。

このように、発達障害を持つ子にとって具体的ではない“分かりづらい言葉”は他にも、「ちゃんと聞きなさい(耳を傾ければ良いのではなく、正しい“聞く姿勢”をとらないといけないことが省略されている)」、「おはよう(同じように挨拶をして欲しいという気持ちは隠されている)」、「やさしくやってね(どの程度の力加減が良いのか具体的な目安がない)」、「今日はどうだった?(今日あった出来事の何を言えばいいのかが分からない大雑把な質問)」、「○○したらダメ(どうしたらよいのかは分からないまま)」など枚挙にいとまがありません。

また、「目を見て話さない。」などのような同時に複数のことをさせる指示、「今日はいい天気だから外遊びをするので帽子かぶって園庭に集合！」などのように長くて一度にたくさんのことを伝える教示(多くの場合、園庭には来ることが帽子を忘れるなど何かを取りこぼすことが多い)、「本当にそれでいいの？」などのような逆説的表現、冗談や皮肉、「お口にチャック！」などのような比喩やたとえ話、「もし○○だったら…」などのような仮定の話も“分かりづらい言葉”になるので注意が必要です。

それでは逆に“分かりやすい言葉”とはどのようなものになるのでしょうか。図6に“分かりやすい言葉”のポイントをまとめてみました。

<図6「具体的な教示(指示)」とは>

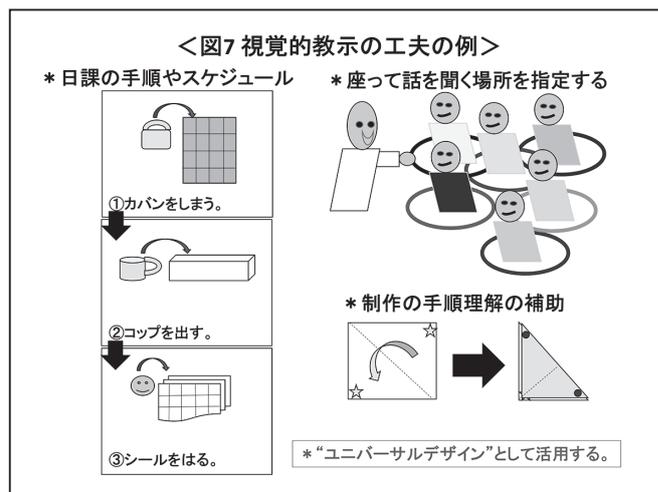
- * 具体的な絵が描けるような内容の指示(名詞と動詞による指示)。
- * ゆっくり、はっきり、ひとつずつ、落ち着いて、近くで伝える。
- * 肯定的な行動(何をしたらよいのか)を教える。
- * くりかえし、必要に応じて言い方(表現)を変えて伝える。
- * 視覚的な手がかりの併用。
(絵・図・写真、目印、しぐさ、お手本、一緒にやるなど)
- * 注目を促して(声かけして)から伝える(個別指導)。
- * 実際にやらせる(実践させる)ことが何よりも大切。

* 相手が何をしたらいいのかが分かって、はじめて“伝えた”ことになる。
相手が行動を経験(実行)して、はじめて“教えた”ことになる。

“分かりやすい”ということは具体的なイメージが浮かぶということになります。つまり、自分がとるべき行動が絵に浮かぶような言葉とい

うことです。したがって、言葉のみの教示よりも目印やしぐさ、お手本、一緒にやってみせるなど、見て分かる視覚的な手がかりを併用した教示の方が分かりやすくなります(図7)。また、口調という点ではゆっくり、はっきり、ひとつずつ、落ちついた口調で伝えることも大切です。そして、先述のように「○○したらダメ」という表現はどのようにしたらよいのかが分からないため、“分かりづらい”だけでなく、かえってNG行動を強調してしまう可能性もあります。特に子どもにとっては、言われたことよりも実際にやったこと(経験したこと)が一番印象に残り記憶や知識として蓄積されていくのではないかと思います。

そのようなことから、指導においては“どうしたら良いのか”という具体的な行動(OK行動)を伝え、OK行動ができるように協力(サポート)し、OK行動をした直後にそれを褒めることで、より一層子どもの記憶や知識に強く残るようにしていくことが重要になると思います。



[事例4] 発達障害を持つ子が分かりづらいものは言葉だけではありません。D君は具体的なモデルが提示されている写生はできても、自由画や作文のような課題ではどのような手順で作品を完成させればよいのかが分からなくて困ってしまう子でした。自由画や作文は自分の思いついたものを本当に好きなようにつけていいというものではありません。あるテーマに沿った一定の範囲内にある対象を、ある一定の範囲内にあるルール(構図や色の選び方、完成させるまでの工程など)に従ったうえで自由に表現するというものであり、そのような“一定の範囲内にある対象やルール”に従う手順が分からな

いとできないことなのです。例えば「運動会の絵を描く」という課題では、運動会で行ったいくつかの出来事（思い出）の中から1つを題材として選び、それを表現するために画用紙の中のどこに何を、どのように、そしてどんな色で描くのかを決める手順があります。これがもし作文であれば、①いつ、②どこで、③誰が、④どうした、⑤どう思った、の順に出来事の説明を整理し、それをどのような言葉使いと文章作成のルール（冒頭は一文字分空けてから書くなど）に従って書くのかという手順があります。このように一見自由に見えるが実は暗黙のルール（マナー）や手順（手続き）がある課題は、それらが分かりづらい発達障害を持つ子にとって苦手な課題の1つです。しかし、丁寧に指導を受けたりコツや方法が分かったりしたら苦手ではなくなりますし、むしろ得意分野にまで極めることができた例も少なくありません。つまり、発達障害を持つということは、学び方や上達の仕方（プロセス）が一般的なやり方とは少し違うということなのです。ですから、子どものつまずきに気がついたら、“（どのようにしたら）できるのか”を模索し、その子らしいやり方（必要な工夫やサポート）を考えていくことが重要なのだと思います（図8）。



物事の順番や条件といった見通しがたたないこともNG行動の原因となることがあります。E君はお絵かきの時間に「外で遊びたい。」と訴えましたが、先生から「ダメです。」と言われて腹を立て部屋から飛び出して行ってしまいました。その後同じような場面になった時に、今度は「お絵かきが終わったら外で遊ぼうね。」と先生が声をかけると、「がんばってお絵かきする。」と言って絵を描き始めました。丁寧な説明の有無がお互いの気持ちがすれ違ってしまうのか一致するのかの分岐点となることがあります。特に言語的な力がある発達障害児の場合はいろいろな物事についての理由、方法、見通し、目安などに関する丁寧な説明が必要であることも多いです。

<図8 子どもの“つまずき”から必要なサポートを知る>

例：運動会の絵を描かないDくん。

* 写生はできるが自由画が描けない場合

- ・具体的なモデルがないので描けない。
- ・描く手順が分からない。



- ① 運動会で記憶に残ったものを1～3つ挙げる。
- ② その中から1つを選ぶ。
- ③ 具体的な構図を決める(下書き)。
- ④ 絵を描く。

* 対象事物に対する興味・認識が弱ければ描けない。

- ・対人交流(社会性)の発達が遅れる自閉スペクトラム症児は人物画が苦手。

* 不器用があり運筆描画が苦手であれば描けない。

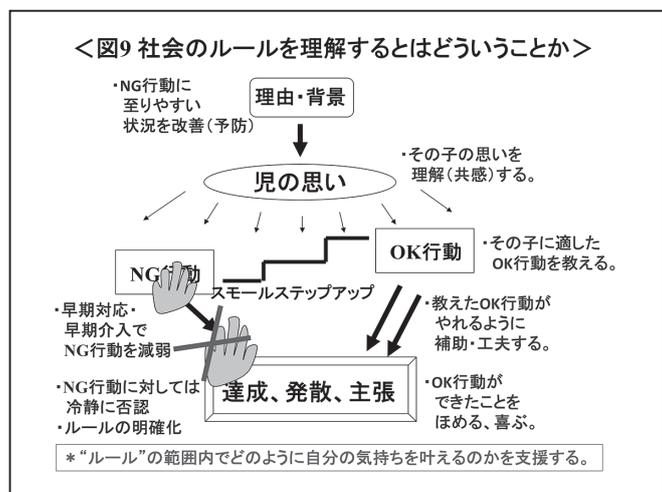
* “できないこと”探しではなく、“できる方法(できる目標)”探しが大事

[事例5] 発達障害を持つ子にとっては順番や全体が揃うのを待つなどの、いわゆる“待機”という行為も、いつまで何をして待っていればよいのか分からず困っていることがよくあります。そして多くの子は困ると我慢ができなくなったり、遊びだしてしまったり、その場から離れていってしまったりしてしまいます。あるいは

4 子どもに寄り添い導く姿勢の大切さ

子どもの行動の背景には、その子なりの様々な思いがあります。子どもは自分の思いを達成させたり、発散させたり、分かってほしいと訴えたいと思ったりして、その思いを叶えるために様々な行動をとります。しかし、その中には周囲の人や全体の状況においてはNGとなる、いわゆるNG行動があります。私達大人はそうしたNG行動を落ち着いて否認し、ルールを明確化していくことが求められます。しかし、それだけではその子の思いは行き場を失ったままであり、根本的な解決には至りません。つまり、一番大切なのは、子ども達がある思いに至った時に、それを正しい(適切な)行動、いわゆるOK行動で叶えていくことができるようになることです。したがって、まずはその子の気持ちをしっかり理解(共感)し、そのうえでその思いを叶えるOK行動を教え、協力し、そして強化していく必要があると思います。もちろん、す

すべての思いを叶えられるわけではなく、寄り添い慰める、あるいは他のことに気持ちを向けさせていく必要がある場合もあります。しかし、それもまた、叶えられない思いがあった時にどのような行動をとればよいのか、どのように考えていけばよいのかを教えていくということです。いわゆる社会性とは、このように目に見えない暗黙の社会のルールの範囲内で、どのようにして自分の思いを叶えたり表現したり処理していけばいいかを習得することなのでしょう。暗黙のルールや手順の理解が苦手な子にとっては、こうした社会性と呼ばれるスキル（技能）も丁寧に教えていく必要があります。（図9）。



〔事例6〕 なお、多くの社会性スキルには基本的スキル習得の後にもうワンステップ上の応用的スキルを教えることを忘れてはいけません。お友達の使っている玩具を黙って取ってしまう（本人からすると借りてしまう）ためにトラブルをよく起こすF君に先生は、「貸して」と言ってから借りるように指導を行いました。その後F君とお友達とのトラブルは減ってきたかに見えましたが、再びトラブルが増加してきました。よく観察すると、F君はお友達に「貸して」と言っているのですが、お友達が「ダメ」とか「後で」と言ってすぐ貸してくれないと怒りだしトラブルになっている様子でした。つまり、「貸して」と言うことは社会性の基本スキルですが、相手の応答次第ではそれが通じない（すぐ自分の思いが叶えられない）こともありますので、そういう場合は次の社会性スキル、つまり応用的スキル（今回で言えば、しばらく他の玩具で遊んでから後で再び「貸して」と言うなど）を使わないといけなわけです。F君のエピソードは、

それがまだ教えられていなかったためにトラブルが再燃してしまったという出来事だったので。他にも、「貸して」という基本的スキルの際には相手が「いいよ」と了解したことを確認することも大切なことであり、そこが未習得だと、「貸して」と言ったとたん（あるいはそう言いながら）手を伸ばして玩具を奪い取ってしまうような行動が見られることもあります。ひょっとすると、その子が「玩具が欲しかったら「貸して」と言うのだよ。」と指導されているとしたら、先述のように「「貸して」と言った後に相手が「いいよ」と言うのを確認してから取るのだよ。」という省略された部分に分かりづかったのだらうと考え、それを教えていくことになります。このように、子どもの様子を丁寧に観察することで、どこまでできて（何を理解している）、どこでつまづくのか（何を理解していないのか）を把握しながら、分かりやすい指導を常に心がけていくことが大切だと思います。

5 多様性の共生を目指すことの大切さ

発達障害を持つ子はそうでない子とは違った物の感じ方や認識の仕方をしていることがよくあります。例えば、今、目の前にある物事や今行っている活動に気持ちが局限し、周囲の状況の変化に気がつかなかったり、すぐに気持ちを切り替えて次の活動に移るのが困難になったりします。そのため、早目に今の活動の終了と次の活動の予告（声掛け）を行い、その子自身が活動の切り替えを了解しやすくなるように配慮することが大切になります。もちろん、それでも幼い子ですから心の折り合いがつかず活動の切り替えに怒ったり泣いたりすることもあるでしょう。その場合はその気持ちを慰め次の活動に少しでも早く気持ちが向けられるように関わることとなります。しかし、早目の予告や本人の了解を得る工夫により比較的気持ちよく活動を切り替えることができる場面も多少増えるかもしれません。先述のように何事もスモールステップアップなので、焦らずあきらめず少しずつ成長の階段をその子がのぼることに寄り添ってあげられたら良いと思います。

〔事例7〕 発達障害を持つ子の中には感覚過敏性という特性を持つ子も少なくありません。Gさんは工作に使う糊の感触が大嫌いで、手に糊がつくと泣き崩れてしまう傾向がありました。このような場合、「Gさんは糊を使わないという

“こだわり”が強い。」などと批判されてしまうことがあります。しかし、発達障害特性から発生する“こだわり”とは、その子（人）にとっての秩序と安定（安心）および意欲を支えるための重要な物事であることが多いです。Gさんのような感覚過敏もある意味その中の1つと言ってもよいでしょう。そして、そうしたその子にとっての“こだわり”の意味を理解したうえで、それがどのくらい（どのように）修正されるべきことなのかをしっかりと検討することが大切です（図10）。

＜図10 発達障害児の“こだわり”への対応＞

- 1 苦手なものは補助する、配慮する。
批判、過度なペナルティを行わない。
- 2 スモール・ステップ・アップで適応度の高いものに変える、
広げる（狭める）、進化させる。
- 3 “こだわり”を修正することへの意欲を促す工夫
“こだわり”に固執することを薄める（気をまぎらわせる）工夫
- 4 良好な人間関係を築く（人と同調・共感ができると自己が広がる）
先に他のことで自信をつけさせながら全体のレベルアップを図る。
- 5 修正の必要性（優先度）を検討し直す（“共生”を目指す）。
こちらの“こだわり（大事にしたいポイント）”を見直し修正する。

*“こだわり”には、“冷静さ”と“柔軟性”で対応することが大切。

特に感覚過敏による拒否は生理的な嫌悪感です。私達が自分にとって生理的に受けつけられない強い嫌悪感を抱く物があつた時、どのようにしたい（どのようにされたい）でしょうか。もし、どうしてもそれは克服しないといけな（慣れないといけな）ものであるとするならば、少しずつ練習していききたいですね。また、他に楽しいことや興味あることに気を紛らわせて慣らしたり、どうしても「これ以上はダメだ。」という時には避難したりする（回避や休憩する）配慮が欲しいですね。そして本音を言えば、最初から回避できる方法はないのかと考えたくなりますね。先ほどの糊つけなどは直接手に糊を付けないといけなということではなく、ヘラなど道具を活用したり手袋をはめたり、スティック糊を使うなど生理的な嫌悪感を回避しつつ本来の目的であるはずの工作に取り組む方法はいろいろ考えつきます。そもそも、その時間（活動）に最もGさんにやってほしいこと（主目的）は工作を楽しませることであるならば、糊を使うということに指導者がこだわりすぎない方がよい場合もあるのだと思います。いろいろな事

例を伺っていると、時には「こだわっているのは子どもの方なのだろうか？大人の方なのだろうか？」と分からなくなることがあります。いずれにしても“こだわり”には“こだわり”で対応してはいけません。“こだわり”には柔軟な発想で、お互いの意思疎通と合意形成をとって“歩み寄り”を図ったり、無理のない慣れさせ方を提案したり、適切な回避方法を用意して活動本来の主目的を達成させたりしていくことが大切です。“きょうせい”という言葉がありますが、その子に施す指導が“共生”なのか“矯正”なのか“強制”なのか、私達は常に自己点検をしながら、子どもに寄り添ったより良い指導を目指していく必要があるのではないのでしょうか。

6 最後に

よく、「苦手なものは、配慮やサポートをせず、あえてそれを行って慣れさせる（克服させる）方がよいのではないか？」といった質問をされることがあります。しかし、子ども自身が苦手克服に対する強い意志を持っているならともかく、そうでない場合は逆効果になると私は思います。特に子どもの学びにとって最も重要な要素は、1面白い（興味がある）、2分かりやすい（やりやすい）、3安心感であると思います。苦手なことややりづらい方法を分かりづらい指導で繰り返されたら、慢性的な失敗や挫折体験によって子どもは意欲や自信を失い、やがては逃避するようになったり無気力になったり反発したりするようになるのではないのでしょうか。特に幼児期の子ども達にとっては、分かりやすくやりやすく教えることが第一であり、そのような指導によって十分な自信と意欲が育つた子は、そこではじめて、さらに難しいことや高度なことに挑戦していくようになるのだと思います。そして子どもが失敗を恐れず、くじけずたくましく成長していくためには、周りの大人達に暖かく見守られしっかり支えられているという安心感が必要不可欠ではないかと思ひます。そのようなことから、子どもに合わせたスモールステップアップによる指導と分かりやすい指導を追求していく姿勢が、子どもを育て指導する私達には求められているのではないのでしょうか。

※本論は平成28年6月24日に行われた名古屋市西部地域療育センター連続講座でお話した内容を一部修正加筆しまとめたものです。

平成28年度 西部地域療育センター連続講座のご案内

第2回 講演会

子どもたちの発達と生活環境

日時 平成28年11月18日(金) 午後3時30分～5時
会場 西部地域療育センター1階 多目的ホール
対象 保育園、幼稚園、小学校、療育施設、関係機関の職員のかた

～ 内容・講師 ～

こども発達センターあおむし 鷺見 聡 センター長 (小児科医)

子どもたちの生活環境は劇的に変化してきました。テレビ・ビデオ視聴、スマホゲーム、塾通いなどに費やす時間が増え、外遊びや家族の団樂の時間が減少しており、子どもたちの発達に悪影響を与えている可能性があります。今の時代には、どのような生活習慣を目指すのが良いか、皆様と考えたいと思います。

所長あいさつ

秋の訪れを虫の音で感じる今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか。

今年の夏はオリンピックの熱気もあり、例年に劣らぬ猛暑の日が続きました。暑さに負けず通っているお子さんや保護者の方には頭が下がるばかりです。

さて、西部地域療育センターでは、初診予約が5ヶ月先という状況になりました。頼りにされていると

所長 宮地 泰士

いううれしい気持ちはありますが、早く支援に結びついてほしいのというジレンマに悩むこともしばしばです。今回の講演は、地域の中でやっている支援の参考になればという内容でまとめています。現場で頑張っておられる先生方からとてもわかりやすかったという褒めの言葉もいただきました。これからも地域の中で安心して生活できるような支援やネットワーク作りを心掛けていきます。

ボランティア募集

保育場面での手助け(室内の活動、園外への散歩など)
教材づくり
保護者活動時における療育児のきょうだいの保育
センター行事(運動会、夏祭りなど)のお手伝い
その他、園の環境整備など

■お問合せ・お申込み■

名古屋市西部地域療育センター

名古屋市西部地域療育センターだより 第35号

発行日 2016年9月

編集・発行 名古屋市西部地域療育センター

〒454-0828 名古屋市中川区小本一丁目20-48

Tel. (052) 361-9555 Fax. (052) 361-9560



この機関紙は古紙パルプを含む再生紙を使用しています。